宗教言語の翻訳 ③

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

グローカルな地平

本誌２月号で指摘した、バベルの塔の神話が示している世界の言語構造、つまり、人類がお互いに意思疎通が困難となるほどの多種多様な言語と、それぞれの言語に根差したイディオムの存在は、「聖なる言葉」と他の諸言語との不一致という緊張関係を生み出す。それは、「聖なる言葉」によって秩序立てられ構築されるグローバルな主たる宗教的真理と、翻訳を通して諸言語によって構築されるローカルな部分的真理という、宗教的真理の主従関係に通底する。宗教言語の翻訳は、「聖なる言葉」に依拠する主たる真理を、目標言語によって部分的な真理として展開する試みであるともいえよう。それは正統な教学あるいは神学から派生した、一種のローカルな教学や神学であるとも考えられる。そして最終的には宗教言語の翻訳は、そのような関係性に位置付けられた構造そのものを飽和しつつ、普遍的な構造的秩序によって地平が融合する境地、つまりグローカルな地平を目指さなければならない。

「聖なる言葉」に依拠するグローバルな主たる真理を、仮に一頭の「象」とするならば、ローカルな教学あるいは神学としての諸言語による翻訳は、その「象」の頭、鼻、歯、背、脚、尾など、「象」の一部分に相当するであろう。諸言語の翻訳は、そのような部分的な真理であり、あくまでも全体としての「象」そのものにはなりえない。しかしながら、「象」全体は、頭、鼻、歯、背、脚、尾など、それぞれの部分から成り立つ。それらを統合していく過程の中で、それまで見いだせなかった全体像が浮き彫りとなる。主たる真理において顕在化しえない「聖なる言葉」の襞の影は、部分的な真理、つまりローカルな教学あるいは神学としての諸言語の翻訳から複合的に照射することによって現前化できるのではないだろうか。

つまり、宗教言語の翻訳によって、平面的な教学あるいは神学を、立体構造として再構築させることができるという可能性を見出すことができよう。「聖なる言葉」によって啓示された原典を諸々の言語へ翻訳するという営みは、まさに原典解釈の遡及と省察を通して、正統な教学あるいは神学を、より精緻なものへと昇華しうる積極的な手段となるのではないだろうか。

> 翻訳者の課題は翻訳言語のなかに原作のこだまを呼びさまそうとする志向を、その言語への志向と重ねるところにある。この点に、創作とはまるで違う翻訳の特徴がある。なぜなら創作の志向は決して言語そのものに、その相対性に向かうものではなくて、もっぱら言語内容の特定の関連へ直接に向かうものなのだから。翻訳はしかし、文学作品がいわば言語の内部の山林自体にあるのとは異なり、その山林の外側に位置して、その山林と対峙している。そして山林に足を踏み入れることなしに、自身の言語のなかのこだまが他言語の作品のこだまとその都度重なって行けるような唯一無二の場所を見いだし、その場所にあって、翻訳は原作を呼び込むのである。（ベンヤミン、野村訳、1994：82）

ベンヤミンは、翻訳を、原作という「山林」の外側に位置し、「山林」と対峙するものであり、初原的かつ具象的な原典の志向性と、派生的かつ理念的な翻訳の志向性の違いを明確にしつつ、「こだま」が共鳴しあうように、諸言語自体が相互に補完しながら、親和する境地に至る道程こそが翻訳者の課題であると述べている。

宗教言語の翻訳によって構築されるローカルな教学あるいは神学と、「聖なる言葉」によって構築されるグローバルな正統教学あるいは神学との相即不離な関係は、翻訳という鋏（かすがい）による諸言語間の起源的婚姻関係ともよびうるであろう。このような関係性に関してポスト構造主義の代表的な哲学者デリダは次のように述べている。

> 翻訳はあれやこれやのことを言おうとするのではない、しかじかの内容を運送し、しかじかの意味負荷を伝達しようとするのではない、というのである。そうではなくて、翻訳は諸言語相互間の姻戚関係を再標記しようとする、おのれ自身の可能性を提示しようとする、というのである。そしてこのことは文学的テクストや聖なるテクストに妥当するのであって、おそらくはこのことが文学的なものと聖なるもの二つながらの本質そのものを、両者の共通の根のところで規定しているのである。（デリダ、高橋訳、1989：31）

翻訳によって結ばれうる「聖なる言葉」と諸言語のきわめて内密な関係は、独特な収斂の関係である。デリダはそれを諸言語相互間の姻戚関係であると指摘しており、その関係が平和なものである限り、翻訳は教学あるいは神学の発展にとって必要不可欠なものとなるであろう。

> ある容器の二つの破片をぴたりと組み合わせて繋ぐためには、両者の破片が似た形である必要はないが、しかし細かな細部に至るまで互いに噛み合わなければならぬように、翻訳は、原作の意味に自身を似せてゆくのではなくて、むしろ愛をこめて、細部に至るまで原作の言い方を自身の言語の言いかたのなかに形成してゆき、その結果として両者が、ひとつの容器の二つの破片、ひとつのより大きい言語の二つの破片と見られるようにするのでなくてはならない。（ベンヤミン、野村訳、1994：85）

ともすれば、様々な相違や齟齬、軋轢をともなう諸言語間の異質性から、翻訳がいかに困難であるかということが注目されがちであるが、ベンヤミンは、言語間の折り合い、和解、宥和は、相互補完という形態を伴いつつ、原作と翻訳双方の新たな生長に向かって志向されなければならないと述べている。

「聖なる言葉」が示す意味世界の開拓は、「聖なる言葉」それのみで完結しうるものではなく、むしろ諸々の言語への翻訳を通してこそ可能となるのではないか。そして、翻訳は常に諸言語間の内密な関係性の表現に目的づけられているのではないか。その眼差しからは、この世界において、現実態にさまざまな言語が存在するという現実、つまりこの世界における言語の多様性が、偶然ではなく、あくまでも必然であった理由が、おのずと明白になるであろう。

［引用文献］

ヴァルター・ベンヤミン（野村修編訳）「翻訳者の課題」『暴力批判論他十篇』岩波書店、1994 年。
ジャック・デリダ（高橋允昭編訳）『他者の言語』法政大学出版局、1989 年。